

ジョルジュ・サンドの『コンスエロ』、 『ルドルシュタット伯爵夫人』における名前の役割

稲田 啓子

はじめに

『コンスエロ』(*Consuelo*)とその続編『ルドルシュタット伯爵夫人』(*La Comtesse de Rudolstadt*)は、1842年から44年にかけて、『独立評論』誌(*Revue Indépendante*)に掲載された、ジョルジュ・サンドの長編小説である。日本でこれらの作品が取り上げられることは、決して多いとはいえないが、『コンスエロ』は間違いなく、サンドの傑作の一つに数えられる。

ただ、『コンスエロ』はそもそも、サンドの中では、アルベールの死によって、完全に終わる作品だった。けれども、当時傾倒していた社会主義者、ピエール・ルルー (*Pierre Leroux*) の勧めによって、サンドは、『ルドルシュタット伯爵夫人』というタイトルの下、コンスエロの旅の続きを描き始める。そのきっかけはどうか、サンドが続編に向けて新しい方向性を見つけ、『コンスエロ』では言い得なかつた事柄を、『ルドルシュタット伯爵夫人』に込めたことは明らかである。したがって、本稿では、『コンスエロ』と『ルドルシュタット伯爵夫人』を、一つの作品と見なして論を進めることにする。

ところで『コンスエロ』を読んでいくうちにまず目にとまるのが、次々と変わるヒロインの呼称である。しかも、続編の『ルドルシュタット伯爵夫人』に入ると、今度は、彼女の恋人アルベールも複数の呼称を持つようになる。つまり、ヒロインだけでなく、もうひとりの主人公とも言えるアルベールの呼称が、同じように移り変わっていくのだ。したがって、彼らの呼称の変遷には、何らかの意味があるはずである。その‘意味’を探るために、まずはヒロイン

14 ジョルジュ・サンドの『コンスエロ』、『ルドルシュタット伯爵夫人』における名前の役割

の呼称の在り方を検討し、ついでアルベールの複数の呼称について、見ていきたい。

1. 身分を越える者

作品のタイトルにもなっている「コンスエロ」という呼称は、物語の中で一貫して、登場する。以下は、続編の『ルドルシュタット伯爵夫人』において、ベルリンのオペラ劇場に雇われたコンスエロが、個人的に親しくなったアメリカ王女に、自分の身の上を明かす場面である。

(1) Consuelo

« (...) J'ignore le nom de mon père ; et quant à celui de ma mère, je crois bien qu'elle était, à l'égard de ses parents, dans la même incertitude que moi. On l'appelait à Venise la Zingara, et moi la Zingarella. Ma mère m'avait donné pour patronne **Maria del Consuelo**, comme qui dirait, en français, Notre-Dame de Consolation. (...) » (III, p.75) (強調筆者、以下同様)

ヒロインを指す呼称として、圧倒的に多く使用されているのが、この「コンスエロ」である。クラシック・ガルニエ版の『コンスエロ』第一巻だけでも、「コンスエロ」の登場回数は、811回にも及んでいる。作品のタイトルそのものが『コンスエロ』なのだから、それも当然のことといえるだろう。けれども、語りと会話の中でコンスタントに多用される「コンスエロ」とは別に、その他の呼称は、ある特定の場面にものみ登場する。それは、下の表①から確認することが出来る。

①『コンスエロ』における、コンスエロの呼称の登場回数

	Venise	Bohême	voyage	Vienne	voyage	Bohême	total
*Zingarella	c=1 d=1	a=2 b=3 c=2	0	a=1 b=6 c=4	0	0	20
*Porporina	0	a=1 b=19 c=14 d=6	a=2 b=1 d=5 e=5	a=2 b=12 c=9 d=2	d=1	0	79
*Bertoni	0	0	a=4 b=12 c=9 d=1	c=5	0	0	31
*la comtesse de Rudolstadt	0	0	0	0	0	b=1 c=2	3

注：(a) 自ら名乗る場合、(b) 他人から直接呼ばれる場合、(c) 語りにおいて
 (d) 他人が間接的に指す場合、(e) 別人のふりをして自分自身を指す場合

ここで少し、表について説明したい。まず左の縦の列が、コンスエロを指す4つの呼称である。上から「ツィンガレラ」、「ボルポリーナ」、「ベルトニ」、そして「ルドルシュタット伯爵夫人」となっていて、右の縦の列が、それぞれの呼称の総合的な登場回数を示している。そして表の上の部分では、左からヴェネツィア、ボヘミア、旅の中、そしてウィーンという地名を挙げているが、これは、コンスエロが移動していった場所を、順番に追っていったものである。この表から分かるとおり、場所によって、コンスエロを指すそれぞれの呼称の登場回数は、大きく異なっている。例えば、「ベルトニ」という呼称の登場回数は、最初の旅における場面に集中しているし、「ボルポリーナ」もまた、主に、初回のボヘミア滞在中と、ウィーンの宮廷において、その使用頻度は高くなっている。つまり、表に挙げている4つの呼称は、それぞれ、場面に応じた、独自の機能を持っているのである。

ここで、それぞれの呼称が、作品の中でどのように登場するのか、いくつか例を挙げて見ていくことにする。まず、「ツィンガレラ」の主な使用方法としては、以下の3つが挙げられる。

(2) Zingarella

De là des cabales pour la Corilla, qui, de son côté, allait jouant le rôle de rivale sacrifiée, et invoquait son nombreux entourage d'adorateurs, afin qu'ils fissent, eux et leurs amis, justice des prétentions insolentes de la **Zingarella** (petite bohémienne). (I, p.110)

このイタリア語の「ツィンガレラ」とは、母と共に放浪生活を送っていたジプシー少女、即ちコンスエロのことである。コンスエロは、元々ヴェネツィアで、歌を歌って生計を立てていたのだが、ある日大作曲家ボルボラにその歌唱力を見込まれ、やがてはプリマドンナとなって、オペラ界で活躍するようになる。

16 ジョルジュ・サンドの『コンスエロ』、『ルドルシュタット伯爵夫人』における名前の役割

そんな中、彼女の貧しい過去を知っている、ライヴアルのオペラ女優コリラが、コンスエロの成功を阻んでくるのである。「ツィンガレラ」は、この引用(2)では語りで登場しているが、コリラやポルポラといった、ヴェネツィア編の登場人物が、しばしばコンスエロをこう呼んでいる。特にコリラがヒロインを「ツィンガレラ」と呼ぶとき、そこにはまず、彼女の生まれに対する蔑みと、悪意とが込められるのである。

とはいえ、「ツィンガレラ」という呼称が、常に否定的な意味合いで用いられるわけではない。それは、以下の引用(3)、(4)を通して、確認することが出来る。ヴェネツィアを離れ、ボヘミアのルドルシュタット伯爵家で暮らし始めたコンスエロは、ある日丘の上から、広大な森を突き抜ける一本の道を見下ろしつつ、次のように思う。

(3) Zingarella

(...) O ma pauvre mère! pensa la jeune **Zingarella**; (...) tu sentais et tu disais toujours que ce bien-être c'était la contrainte, et ce repos, l'ennui, mortel aux âmes d'artiste. (I, p.389)

このように、コンスエロが放浪していた母を想い、そして母のような自由な生き方を望むときには、その心理状態に対応するかのよう、コンスエロは「ツィンガレラ」になるのである。さらに、未来の夫となるアルベール伯爵にあっては、「ツィンガレラ」と呼ばれていたコンスエロの卑しい境遇を蔑むどころか、むしろ心から賛美し、彼女への想いを一層、強くする。

(4) Zingarella

(...) car je suis, non de race, mais de condition, une sorte de Zingara, mon cher comte. Ma mère ne portait pas d'autre nom à Venise, quoiqu'elle se révoltât contre cette appellation, injurieuse, selon ses préjugés espagnols. Et moi j'étais, je suis encore connue dans ce pays-là, sous le titre de **Zingarella**.

—Que n'es-tu en effet un enfant de cette race persécutée ! répondit Albert : je t'aimerais encore davantage, s'il était possible ! » (I, p.339)

アルベール伯爵の従妹、アメリーの音楽教師としてボヘミアにやって来てからは、次の引用 (5) のように、コンスエロは自ら「ポルポリーナ」と名乗る。先の①の表を見ても分かるように、コンスエロが伯爵家で過ごすボヘミアや、宮廷に赴くウィーンでは、明らかに「ポルポリーナ」の使用頻度は高くなっている。その理由は、コンスエロがあくまで、大作曲家ポルポラの愛弟子、プリマドンナ「ポルポリーナ」として、伯爵家や宮廷に招かれていることに在る。つまり「ポルポリーナ」は、ヒロインが、いわゆる上流階級の人たちと対面する場合において、用いられる呼称だと云えるのである。

(5) Porporina

— J'ai un nom étranger, difficile à prononcer, répondit Consuelo. (...) je partage donc désormais, avec le grand chanteur Huber (dit le Porporino), l'honneur de me nommer la **Porporina**; (...) (I, p.182)

ルドルシュタット伯爵家に、ある招かれざる客がやって来たことによって、コンスエロはボヘミアを離れることになる。その客というのが、ヴェネツィアでコンスエロを裏切った、昔の恋人アンゾレットである。彼女はアンゾレットから逃れるかのように、ポルポラの居るウィーンを目指して出発する。その際、身の安全を守るために、旅芸人の少年に扮したコンスエロは、男装した自分に相応しい名前を付けようと、自分にこう言い聞かせる。

(6) Bertoni

— La première abréviation vénitienne venue, Nello, Maso, Renzo, Zoto... Oh! non pas celui-là, s'écria-t-elle après avoir laissé échapper par habitude la contraction enfantine du nom d'Anzoleto. (...) **Bertoni**. Ce sera un nom italien quelconque, et une espèce de diminutif du nom d'Albert. (II, p.125)

こうして、コンスエロはアンゾレットの愛称「ゾット」と名乗ることを完全に否定し、アルベールの愛称「ベルトニ」と呼ばれることを望む。この旅で、コ

18 ジョルジュ・サンドの『コンスエロ』、『ルドルシュタット伯爵夫人』における名前の役割

ンスエロは昔の恋人に対する未練を断って、アルベールへの愛情に傾き始めるのである。しかし、新天地を求め、ベルリンへと再び旅を始めた途中で、コンスエロは、アルベール伯爵が瀕死の状態にあることを知る。彼女は急遽ボヘミアに引き返して、そこでアルベールと結婚するが、彼は結婚の誓いを交わした直後に死んでしまう。元々、この身分違いの結婚に反対していたアルベールの叔母は、コンスエロに向かって、「ルドルシュタット伯爵夫人ともあろう人が、また旅芸人になるなんて！」といて、「オペラ歌手」という職業への軽蔑を露にする。

(7) la comtesse de Rudolstadt

(...)— Je n'oublierai jamais, Madame, que je suis la veuve du noble Albert, et ma conduite sera digne de l'époux que j'ai perdu.

— Et cependant **la comtesse de Rudolstadt** va remonter sur les tréteaux ! (II, p.539)

けれども結局、コンスエロは再びプリマドンナとなることを決意する。そのせいもあってか、正編である『コンスエロ』で「ルドルシュタット伯爵夫人」という、ヒロインの新しい呼称が登場するのは、3回だけである。登場回数がこのように稀であるがために、「ルドルシュタット伯爵夫人」という呼称は、卑しい生まれのヒロインが、ここで「伯爵夫人」という高い身分に就いたことを、読み手に強く印象付けている。さらに、正編『コンスエロ』の結末は、次のようになっている。

(8) la comtesse de Rudolstadt

Une demi-heure après, Consuelo, dont le cœur s'était brisé en quittant ces nobles vieillards, franchit avec le Porpora la herse du château des Géants, sans se rappeler que ce manoir formidable, où tant de fossés et de grilles enfermaient tant de richesses et de souffrances, était devenu la propriété de **la comtesse de Rudolstadt**. (II, p.546)

このように、正編『コンスエロ』は、ヒロインがかなりの財産を相続し、「ルドルシュタット伯爵夫人」になったことを強調して、終わっている。

まとめると、コンスエロには、物語の核となる「コンスエロ」という名前以外に、次の4つの呼称が存在するのである。（ヨーロッパ各地を舞台とするこの作品では、登場人物の名前が様々な言語から成っているので、以下、「ツィンガレラ」と、実在する有名な人物の名前は原音表記とし、その他の人物については煩雑さを避けるため、基本的にフランス語読みにする。）

- (1) ツィンガレラ (Zingarella) (‘生まれ’を表す呼称)
- (2) ポルポリーナ (Porporina) (オペラ歌手としての芸名)
- (3) ベルトニ (Bertoni) (旅の中で男装した時の仮の名)
- (4) ルドルシュタット伯爵夫人 (la Comtesse de Rudolstadt) (身分を表す呼称)

これらの呼称は、いわば、コンスエロの属性を示すものである。コンスエロは、ヴェネツィアからボヘミアへ、そしてウィーンからベルリンへと、18世紀中頃のヨーロッパ各地を転々としていく。そうした中で、ヒロインが置かれる立場や環境は当然変化し、その変化が、同時に呼称の複数性と重なりあっているのである。彼女が、一つの場所、そして一つの名前に留まることはない。旅と共に、この絶えず移り変わる呼称、つまり属性は、固定化されないコンスエロの「在り方(生き方)」を示している。それは、今の自分を脱皮しながら、常に、在るべき自己を追及していく姿であるといえよう。

呼称の変遷は、一つに、自己規定の変遷を意味するのである。

2. 身分を壊す者

それでは、アルベールの場合はどうか。アルベールにも同じく、「アルベール・ポディブラ (Albert Podiebrad)」という本来の名前とは別に、以下のような呼称が与えられている。

まず(0)番として、アルベールの前世である、ジャン・ジシュカ (Jean Ziska) が挙げられる。ジャン・ジシュカとは、1420年に、皇帝と教皇が差し向けた十字軍からプラハを守った、急進フス派であるターボル派の長で、歴史上実在した人物である。アルベールは、自分をジシュカの生まれ変わりだと信じてい

20 ジョルジュ・サンドの『コンスエロ』、『ルドルシュタット伯爵夫人』における名前の役割

るのだが、彼とジシュカとが別人であるのは明らかであるため、ここでは、次の呼称のみを、問題とする。

- (1) アルベール・ド・ルドルシュタット (Albert de Rudolstadt)、またはアルベール伯爵 (le comte Albert) (身分を表す呼称)
- (2) トリスメジスト (Trismégiste) (ベルリンの宮廷に仕える‘魔術師’としての職業名)
- (3) 仮面をつけた騎士 (le chevalier) (逃亡中の仮の名)
- (4) リヴェラニ (Liverani) (秘密結社「見えざる者たち」の会員名)

② 『ルドルシュタット伯爵夫人』における、アルベールの呼称の登場回数

	Berlin	Spandaw→la fuite	dans le château pittoresque	Épilogue	Lettre de Philon	total
*le comte Albert /Albert de Rudolstadt	d=11	d=1	c=2 d=12	c=2	c=2 d=1	31
*Trismégiste	c=2 d=18	0	a=1 c=3 d=4	c=1	a=1 b=1 c=28	59
*le chevalier	0	b=1 c=13 d=24	c=7 d=4	0	0	49
*Liverani	0	0	a=3 b=6 c=39 d=16	c=3 d=2	a=1 b=1	71

注：(a) 自ら名前を否定する場合、(b) 他人から直接呼ばれる場合、(c) 語りにおいて、(d) 他人が間接的に指す場合

この表から窺えるとおおり、アルベールの呼称は、コンスエロの場合と同様、物語の局面と完全に対応して描かれている。つまり、これらの呼称もまた、アルベールの属性を示すのである。

ただ、アルベールは、『コンスエロ』の結末で、既に死んだはずである。それでも読者は、作者サンドが繰り返す様々な暗示を通して、徐々にアルベールの蘇生を期待するようになるが、「トリスメジスト」、「シュバリエ」、「リヴェラニ」が指す相手が全て同一人物で、しかもそれはアルベールであるという確証を、読み手はなかなか得ることは出来ない。そんな一種のミステリーは、物語の結末に近づくまで続く。一体なぜ、アルベールの名前は次々と変わって

いったのか。その理由の一つに、彼が仮死状態から蘇ったあと、爵位も財産も全て放棄し、「アルベール・ド・ルドルシュタット」として、再び生きることを拒んだことが挙げられる。かつて彼は、従妹のアメリーに、次のように言っていたのである。

(9) Sachez donc, Amélie, que notre arrière-grand-père Wratislaw n'avait pas plus de quatre ans lorsque sa mère Ulrique de Rudolstadt crut devoir lui infliger la flétrissure de quitter son véritable nom, le nom de ses pères, qui était Podiebrad, pour lui donner ce nom saxon que vous et moi portons aujourd'hui, vous sans en rougir, et moi sans m'en glorifier. (I, p.205)

つまり、アルベールの「ルドルシュタット」という高貴な家名は、彼の祖国ボヘミアが、大国オーストリアによって支配されているという事実の、シンボルでしかなかったといえる。仮死状態から、いわば新しい生を受けたアルベールは、これを機に、屈辱的な呼称から解放されようと、自ら社会的地位を捨て去ったのである。田中克彦は『名前と人間』の中で次のように云っている。「人は、生きている間のほとんどの時間を、名前と共に生き、苦しみ、争ってきたと言えるのである⁽¹⁾」——この言葉は、アルベールの生き様に当てはまる。彼はまさしく、「自分の名前と闘う」人間の、典型であったといえよう。

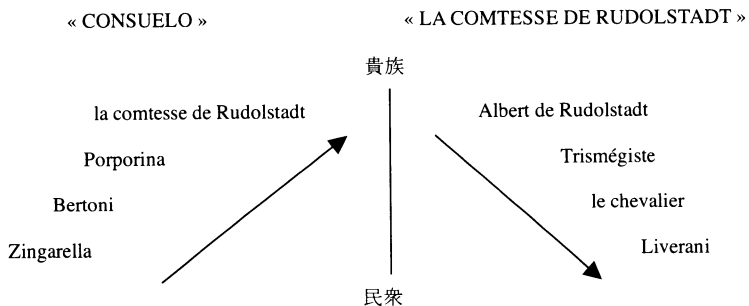
3. '道' の発見

コンスエロとアルベールの身分の移り変わりは、図にしてみると以下のようになる（この図において、ツィンガレラとベルトニヤ、シュバリエとリヴェラニなど、呼称が示す社会的な地位の位置関係には、多少曖昧さが残るのだが、ここではあえて、呼称の時間的な流れを優先して表している。）伯爵家の一人息子と、ジブシー少女、2人の出発点は上下で対を成して、彼らの変遷は、まるで、合わせ鏡のようになっている。（図1 参照）

長い旅と試練の果てに、恋人たちが辿り着く先は、「フィロンの手紙 (Lettre

de Philon)」という、物語の最後に挿入された書簡で明らかにされる。

(図1)



下の引用(10)における nous は、「フィロンの手紙」の語り手であるフィロンと、彼の連れれの青年スパルタクスを指している。彼らはボヘミアの地で、ある不思議な女性とその一家を、目撃するのである。

(10) (...) nous vîmes arriver une femme devant laquelle les paysans ouvrirent avec respect leur phalange hérissée d'armes rustiques. Nous les entendîmes murmurer : **La Zingara ! la Zingara de consolation !** (III, p.544)

「ツィンガラ」とは、紛れも無く、ヒロイン、コンスエロを指す。かつて「ツィンガレラ」であったコンスエロは、最終的に、「ルドルシュタット伯爵夫人」という身分も、「ポルポリーナ」という名声も放棄して、「ツィンガラ」になるのである。「ツィンガラ」とは、ジプシー少女 (petite bohémienne) を表す「ツィンガレラ」に対し、大人のジプシー女性 (bohémienne) を示す。

引用 (10) の Zingara de Consolation と、引用 (1) で挙げた「コンスエロ」の名前の由来となっている守護聖女 Maria del Consuelo は、パラレルな関係になっている。これは文字通り、コンスエロが民衆にとっての‘癒し’となったことを意味する。そもそもスペイン語の名前である「コンスエロ」は、フランス

語で *consolation*、即ち癒しのことである。「コンスエロ」という名前の意味については、次のアルベールの言葉からも、確認することが出来る。

(11) « O Consuelo, Consuelo ! te voilà donc enfin trouvée ! (...)

— Je t'appelle consolation, reprit Albert toujours en espagnol, parce qu'une consolation a été promise à ma vie désolée, et parce que tu es la consolation que Dieu accorde enfin à mes jours solitaires et funestes. (I, p.243)

さらにヒロインの名前に焦点を当てると、父親が誰だか分からない「コンスエロ」には、姓 (*nom de famille*) というものがない。言い替えるならば、元々ヒロインには、「癒し」という抽象概念に基づく名前しかないのである。ただ、ポルポラに歌唱力を見込まれて、ジプシー生活から、徐々に上流階級に足を踏み入れるようになってからは、彼女の境遇と共に、呼称の性質も変わる。コンスエロは、養父となった大作曲家ポルポラの名前をもらって、「ポルポリーナ」と名乗ったり、夫アルベールと結婚してからは、「ルドルシュタット伯爵夫人」にもなるし、さらに旅の中で男装した折には、アルベールの名前をとって「ベルトニ」と名乗ってもいる。これらの呼称はいずれも、一種のあだ名 (*surnom*) だといえるが、あだ名については、イギリス出身の人類学者ピット・リヴァーズが、「あらゆる名付けは権力行為であって、特にあだ名は、洗礼名や姓以上に、名付けることに潜む権力性を、明白な形で浮かび上がらせる⁽²⁾」と言っているように、コンスエロのあだ名もまた、彼女が置かれる世界が広がれば広がるほど、男性の名前、即ち男性的権力に依存した形になるのである。周知の通り、サンド自身も、女性が男性なりに活躍する場のなかった当時であって、自分が男性作家に思われるように、恋人ジュール・サンドーの名前をとってジョルジュ・サンド、という男性のペンネームにしたわけだから、名前が帯びる特有の差別性といったものを、彼女が強く意識していたのは確かだといえよう。

コンスエロに話を戻すと、オペラ女優として生きていくことを勧める養父ポルポラが、必然的にコンスエロが伯爵夫人となることを意味するアルベール

との結婚に、賛成するはずがなく、「ボルポリーナ」という属性と、「ルドルシュタット伯爵夫人」という属性は、コンスエロの中でしばしば対立する。けれども、自己規定の変遷の果てに、夫アルベールと共に放浪の音楽家となって生きていくことを決めたコンスエロは、オペラ界で名の知れたボルボラの影響下にある「ボルポリーナ」でも、夫アルベールの家名である「ルドルシュタット伯爵夫人」でもなく、ただ「ツィンガラ」となる。名前というのは、ふつう、人物の生まれた場所や血統を示すものだが、ジプシー女を意味する「ツィンガラ」という呼称は、そのどちらも示すことはないし、ましてや父親や夫の保護下に在ることを仄めかすこともない。これは、コンスエロが最終的に得た、女性として、芸術家としての自由を示すのではないだろうか。

一方、物語の最後に来て、アルベールは自ら、次のように名乗る。

(12) — Ni Liverani, ni Trismégiste, ni même Jean Ziska, (...) Mon nom est homme et je ne suis rien de plus que les autres hommes. (III, p.547)

このようにアルベールは、これまでの固有名詞を全て否定し、コンスエロの「ツィンガラ」と同様、「人間 (homme)」という、個人を特定することのない普通名詞で呼ばれることを望む。これは恐らく、一種の社会的自由と、ロマン派が目指した自己の解放をも意味するのではないか。テリー・イーグルトンの言葉を借りれば、人間同士の差異を解放することは、我々（ここではアルベール）が真の個別性を発見し、それを創造する作業に欠かせないものだったのである⁽³⁾。

おわりに

サンドは、コンスエロを「ツィンガラ (Zingara)」に還元し、かつて貴族であったアルベールをただの「人間 (homme)」とした。2人が‘放浪の音楽家’となることによって初めて、それぞれ異なる次元にあった彼らの呼称（属性）は、同次元に収まるのである。コンスエロは、フィロンの手紙の中で、夫アル

ベールと共に見出した‘放浪の音楽家’としての生き方を、次のように誇らしげに語る。

(13) (...) Nous autres, nous n'avons pas besoin de l'argent du riche, nous ne mendions pas ; (...) En attendant, Dieu nous permet, à mon époux et à moi, de pratiquer cette vie d'échange, et d'entrer ainsi dans l'idéal. Nous apportons l'art et l'enthousiasme aux âmes susceptibles de sentir l'un et d'aspirer à l'autre. (...) Enfin nous avons réalisé la vie d'artiste comme nous l'entendions ; (...) (III, p.538)

コンスエロとアルベールが、なぜ、このような‘ジプシー’という生き方を選んだのか。その答えは、1844年3月、サンドが、アルフォンス・フルーリーに宛てた手紙からも、うかがうことが出来る。以下の手紙における「ズデンコ(Zdenko)」は、『ルドルシュタット伯爵夫人』の登場人物で、コンスエロとアルベールの息子のことである。

(...) Je suis la fille d'un patricien et d'une bohémienne, comme le jeune Zdenko de mon roman. Je serai avec l'esclave et avec la bohémienne, et non avec les rois et leurs suppôts. ⁽⁴⁾

実際、サンドが、労働者主体の社会の実現を目指して、二月革命に参加したことは有名だが、この頃のサンドは特に、ルルーと同じく、民衆こそが神の意志の神聖な受託者であって、世界の未来は、民衆の中にあると考えていた⁽⁵⁾。

紆余曲折の末に、ヒロインとヒーローは共に民衆の側に立ち、彼らに音楽と福音を広めていく。その姿こそが、常に民衆と共に在ろうとした、サンドの思想の反映なのである。

使用テキスト

George SAND, *Consuelo, La Comtesse de Rudolstadt*, t.I, t.II, t.III, Classiques Garnier, 1959. (引用に付したページ数はこのテキストによる。)

註

(1) 田中克彦『名前と人間』、岩波新書、1996年、p.10

26 ジョルジュ・サンドの『コンスエロ』、『ルドルシュタット伯爵夫人』における名前の役割

- (2) J・A・ピット・リバーズ、『シエラの人びと：スペイン・アンダルシア民俗誌』、野村雅一訳、弘文堂、1980年、pp.189-197.
- (3) テリー・イーグルトン、『ポストモダニズムの幻想』、大月書店、1998年、pp.164-165.
- (4) George SAND, *Correspondance*, t.VI, Classiques Garnier, 1969, p.487.
- (5) ミシェル・ペロー『サンドー政治と論争』、持田明子訳、藤原書店、2000年、pp.27-28.

参考文献

- CAORS Marielle, *George Sand de voyages en romans*, ROYER, 1993
- CELLIER Léon, « L'occultisme dans *Consuelo* » in *Revue de la Société des Études romantiques*, n°16, 1977, pp.7-19.
- DIDIER Béatrice, *George Sand écrivain « Un grand fleuve d'Amérique »*, Presses Universitaires de France, 1998
- LAFORGE François, « Structure et fonction du mythe d'Orphée dans *Consuelo* de George Sand », in *Revue d'Histoire littéraire de la France*, n°1, 1984, pp.53-66.
- MICHEL Arlette, « Structures romanesques et problèmes du mariage d'*Indiana* à *La Comtesse de Rudolstadt* », in *Revue de la Société des Études romantiques*, n°16, 1977, p.40.
- STITOU Abdellah, *George Sand interprète de la pensée de Leroux*, Presses Universitaires du Septentrion, 2000
- VERMEYLEN Pierre, *Les idées politiques et sociales de George Sand*, Editions de l'Université de Bruxelles, 1984
- アラン『アラン文学論集』、杉本秀太郎訳、白水社、1964
- 石川達夫『黄金のプラハ 幻想と現実の錬金術』、平凡社、2000
- 坂本千代「宗教的コミュニケーションに関する一考察——サンドの『コンスエロ』におけるコミュニオンをめぐって」『国際文化学研究』10号、神戸大学国際文化学部、1998、pp.43-59
- 坂本千代「ジョルジュ・サンド作『コンスエロ』論考アルベール＝ジシュカ＝サタンについて」『国際文化学研究』19号、神戸大学国際文化学部、2003
- 薩摩秀登『プラハの異端者たち—中世チェコのフス派にみる宗教改革』、現代書館、1998
- 出口顯『名前のアルケオロジー』、紀伊國屋書店、1995
- ドゥコー、アラン『フランス女性の歴史4—目覚める女たち』、山方達雄訳、大修館書店、1981
- 日本ジョルジュ・サンド研究会『ジョルジュ・サンドの世界』、第三書房、2003

(博士課程後期課程)